

これでいいのかも知れない

僕はその三人の前を通らないと、僕のバス停へは行けない。  
僕はそれから、彼女のそばを、必死になって、  
自分の感情を隠し、こわい物の前を通る様に、通り過ぎた。  
その後どうしたか、僕の頭は真っ暗で、記憶がない。

家に帰って一人になっても、  
僕はもう悲しい気持ちで一杯だった。  
また、僕は自分の勇気のないのを責めた。

僕には勇気がないんだ。  
僕は男らしくないんだ。  
僕は思った事を実行する実行力がない。  
そんな、つまらない人間だ、  
と、僕は自分を責めていた。

やがて、僕は、逆にこれでいいのかも知れない、  
これで、忘れられるものなら、忘れよう、  
と、思う様になった。

それからは、彼女が僕を見ている気配があっても、  
僕は、逆に、彼女を避けて、学校の仲間の間に  
僕は身を隠くし、全く、彼女に目を向けようとはしなかった。

その時には、僕はもう、彼女に視線を向ける  
勇気も気力もなくなっていました。

人前で涙なんか出す勇気もないし、  
「上を向いて歩く」こともなかった。  
僕は、いつも下を見て歩いてきた。